

## ドイツ文学史記述文献リスト（1）

佐野晴夫

山口大学へ着任した新しいドイツ語教官が、最大の関心事である研究上の蔵書を確認するため、学内のゲルマニストの研究室や図書館を巡り、検索するとき、ドイツ文学史関係の書籍が法外に多いという印象をもつ。そして大学の前身である旧制高等学校や高等商業学校に在職した教師たちの収集した図書の足跡を見るならば、まるで文学史以外には興味がなかったのか、と訝しく思うほどである。とは言いながらも、近代日本における先駆的なゲルマニストたちの購入した洋書、たとえば「長江藤次郎教授蔵書之印」という登録印と分類記録をのこす書籍をはじめとして、文学史関係のリスト作成をするうちに、それが一方的な思いこみにすぎず、実際には、僅か30種類程度にすぎない事実、またびっくりする。刮目したのは、冊数そのものではなく、それら図書の占める空間上の量的な威容さであったことに気付き、改めて、その差異に驚く。

いま、ここで、不用意に「文学史」という用語を使用した、この部門の研究領域は広大で多岐にわたっている。歴史としての文学史の叙述の問題は、文芸学における文学史の意義についてばかりではなく、特殊研究として、記述対象（詩人・作品）の淘汰基準について、記述者の歴史観ないしイデオロギーについて、文学史上の時代区分について、時代区分上の名称と様式概念について、国民文学と世界文学との関連性について、市民時代の文学と社会主義文学との関係について、記述者の美的・思想的価値について、つまり、審美的、宗教的、倫理的、政治的、社会的な価値観について等の事項が、一般的にまた個別的に、文学史の研究対象となりうる。勿論、ベネデット・クローチェのように、文学史の存在そのものに否定的な立場をもつもの、そうでないまでもハンス・ローベルト・ヤウスのように、文学史の現代的意義において挑発的なものもある。確かに、焦眉の急である主題を提示する現代文学にに対して共通の問題意識をそなえた他の詩人や他の芸術手段で表現する作家、ないしは文芸に造詣のある演出家とか追体験できる読者にくらべて、文学史家の対応する能力に欠ける現状を見るとき、彼らに肯首したくなる。また、ドイツにおける教育制度においても、大学進学に必要な試験アービトゥアの科目としての位置づけを失って、

外された現実を直視するとき、出版される文学史の意義基盤はまったく失われたかのような錯覚を与える。果たして、そうだろうか。それらを確認するためにも、その書目リストの作成が急がれるであろう。

勿論、ローベルト・アルノルトの著書「近代ドイツ文学史のための一般書誌学」(1910)にならって、全発展史・時代的断面史・空間的に地方に限定したもの・宗教上の宗派別に限定したものという形態で分類することも、抒情詩・叙事詩・劇詩について個別的ジャンルに従うことも、さらにはコミックな文学やエロチックな文学とか美的カテゴリーによって、さらには書簡体文学、翻訳文学、青少年文学、ジャーナリズム的文学等といった形式にわけるとも出来よう。詩人の時代的な年代記であろうと、また文学の歴史の時期的な文学現象を対象に選んだ研究書であろうと、文学の歴史と解するかぎり、その術語を用いて良からう。だが、我々の場合、ドイツ国、オーストリア国、スイス国という同一の言語文化を共有する人々の「文学史」という複合した概念でとらえることにして、ベルリンとかバイエルンとかいった地域的制約をもつ文芸に限定しないようにしよう。また整理上の技術的な一方法として、原則として、“deutsche Literaturgeschichte”のカテゴリー、ないしそれに隣接する表記を有するものを中心に扱うことにしよう。それは、当然、ドイツ人以外の著者の労作をも加えるが許される。

ゲルマニストが史的研究をはじめようとして、まず重要な手引き書と称すべきヨハンネス・ハンゼル著「ゲルマニストのための書誌学・学生版」をひもとくとき、そこには、もとめる通史にあたるものの手引き書を含めて、30種挙げられているにすぎない。ましてパウル・ラウベ著「ドイツ文芸学入門書誌学」によれば16種列挙されているにすぎない。初学者ならば、事足りるかもしれない。しかし、文学史記述の歴史そのものを調べたいと希求するものに答えてくれる書籍は、わずかロベルト・アルノルト著「近代ドイツ文学史一般書誌学」にすぎない。だが、この一書も1909年までに発行された書籍に限定され、それ以降は欠けている。このような事情から、文学史そのものに関連するテーマを選ぶものは、自ら、その書目リスト作りを企てざるをえなくなる。

そこで、その際、自ら国内外の諸大学の図書館等で検索した書目や文芸学関係の研究書の巻末におかれた文献のほか、次のような書誌文献を参考にしてリストを作成してみることにしよう。

1. Robert Arnold: Allgemeine Bücherkunde zur neueren deutschen Literaturgeschichte. Straßburg 1910.

2. Johannes Hansel : Bücherkunde für Germanisten. Studienausgabe. 5., vermehrte Auflage. Berlin 1968.
3. (Hrsg.) Clemens Köttelwesch : Bibliographisches Handbuch der deutschen Literaturwissenschaft 1945-1972. Bd. 2, 1830 bis zur Gegenwart. Mitarbeit H. Hüttermann und C. Maihofer. Frankfurt am Main 1976.
4. Paul Raabe : Einführung in die Bücherkunde zur deutschen Literaturwissenschaft. 1959 ; <sup>8</sup>1975. Stuttgart.
5. Christian Gottlob Kayser : Bücherlexikon 1750-1910. Leipzig. (New York / London, Johnson Reprint Corporation 1961.)
6. Deutsches Bücherverzeichnis. Eine Zusammenstellung der im deutschen Buchhandel erschienenen Bücher, Zeitschriften und Landkarten. Nebst Stich- und Schlagwortregister. Leipzig 1916-1984.
7. Internationale Biographie zur Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zur Gegenwart. Er arbeitet von deutschen, sowjetischen, bulgarischen, jugoslawischen, polnischen, rumünischen, tschechoslowakischen und ungarischen Wissenschaftlern unter Leitung und Gesamtedaktion von Günter Albrecht und Günther Dahlke. Teil I und II / 1.

ところで、書目リストを作成する際に、内容毎に、あるいは著者のアルファベット順や発行地別によって整頓することも可能であるが、方法論的な歴史的鳥瞰図を得るためにも、著者の学究的な関心の時代的特徴をとらえるためにも、時期別に、しかも年度毎に配列することが最も良からう。だが、そのとき、ドイツ語圏で発行されたものであっても、著者が自国語以外で記述した場合、今回は目録からはずした。逆に、ドイツ語で執筆された限りは外国人の著述で、しかも外国で刊行されようとも、これに加えた。そこで、まず、学術語と言えはラテン語であった時代に、やっとドイツ語が学術語へ進出しはじめた時期である17世紀後半まで遡及し、この時点以降にドイツ語を使用して出版されたドイツ文学史の記述を、順次、書誌学的に観ることにしよう。

## ドイツ文学史目録

### A. 17世紀から1830年まで

1. Dan. George Morhof : Unterricht von der Teutschen Sprache und Poesie, deren Ursprung, Fortgang und Lehrsätzen. Worbey auch von der reimen-

- den Poeterey der Ausländer mit mehrern gehandelt wird. 1682 ; <sup>3</sup>1718.
2. Jacob Friedrich Reimmann : Versuch einer Einleitung in die Historiam sowohl insgemein als auch in die Historiam Literariam derer Teutschen insonderheit. 6 Bde. 1708.
  3. Karl Friedrich Flögel : Geschichte des gegenwärtigen Zustandes der schönen Literatur in Deutschland (Jauersches Schulprogr.) 1771.  
著者はシュレジア生まれの著名な博学者にして美術家である。
  4. (Leonhard Meister) : Beyträge zur Geschichte der deutschen Sprache und National-Literatur. 1771 ; <sup>2</sup>1780.  
第2版で著者名が初めて使用された。
  5. (K. A. Küttner) : Charaktere teutscher Dichter und Prosaisten. 1781.  
発展史全般より年代記的に整理され、しかも詩人像を伝記的・美学的に編集している。
  6. Johann Gottfried Eichhorn : Litterärgeschichte. Göttingen. 1789.  
歴史批判的な福音派の神学者で、聖書研究を神話の概念で仕事をした人物。
  7. Leonhard Meister : Charakteristik deutscher Dichter. 3 Bde. 1789-1793.  
年代順に並べられ、Heinrich Pfenninger の挿し絵を付けている。第3巻は5分冊から成っている。
  8. Erduin Julius Koch : Compendium der deutschen Literaturgeschichte von den ältesten Zeiten bis auf Lessings Tod. 1790 ; <sup>2</sup>1795-98.  
第2版は《Grundriß einer Geschichte der Sprache und Litteratur der Deutschen bis auf Lessings Tod》と改題されているが、年代記風に見通せる専門的な見取り図にまとめられ、素材的な視点から整頓された文献書である。つまり、ギリシャ・ラテンの文学研究者 F. A. Wolf にならて、学問的編年史に近く、次代に有用である。
  9. Johann Kasper Friedrich Manso : Kurze Übersicht der Geschichte der deutschen Poesie bis zum Jahre 1721. 1792-1808.  
シラーの《Horen》に鋭い批判を行い、著者はゲーテとシラーより雑誌「クセニエン」の中で攻撃を受けたブレスラウの教育者であり、18世紀中期の立脚点より判断した真摯な労作である。21年までのドイツのポエジー史を簡単にスケッチしている。第1巻に J. G. ディークと G. シャッツとが編んだズルツァー著「美的諸芸術の一般的理論」に対する

補足が加えられている。ズルツァーに対する補足を添えた第8巻で「ボードメールとブライティンガーとの批評的労作からゲーテのイフゲニア並びにカントの判断力批判の出現までのドイツ・ポエジー展望」として継続された。

10. Friedrich Bouterwek : Geschichte der Poesie und Beredsamkeit seit dem Ende des dreizehnten Jahrhunderts. 12 Bde. Göttingen 1801.  
半カント派の「絶対的潜勢力説」の提唱者で、ユニークな美学理論を持つ。
11. Franz Horn : Geschichte und Kritik der deutschen Poesie und Beredsamkeit. Von den Anfängen bis etwa auf 1800. 1805.  
シェイクスピアやドイツ文学の授業を得意とする教師で、個別作品の多少上滑りにながれる特徴を配列するロマン的な手法をとった。
12. Theodor Heinsius : Geschichte der deutschen Literatur oder der Sprach-, Dicht-, und Redekunst der Deutschen. Von den Anfängen bis auf die Klassiker. 1811.  
多数の参考書目が掲載され、文献学上の配慮が特にされている。
13. Franz Horn : Die schöne Literatur Deutschlands während 18. Jahrhunderts. 2 Bde. 1812-13.
14. Ludwig Wachler : Vorlesungen über die Geschichte der deutschen Nationalliteratur. 2 Bde. 1818-1819.  
関連性の緊密な、しかも格調の高い記述から成り、伝記や文献をおさえて、第1巻で16世紀終わりまで、第2巻でヴァハラーの時代まで取り扱っている。
15. Franz Horn : Die Poesie und Beredsamkeit der Deutschen von Luthers Zeit bis zur Gegenwart. 4 Bde. 1822-29.
16. Ehrenfried Stöber : Kurze Geschichte und Charakteristik der schönen Literatur der Deutschen. 1826.  
著者は詩作をする弁護士で、K. Pfeffel, G. D. Arnold, J. P. Hebel たちと親交をもつ著名なドイツ系アルザス人であった。
17. August Koberstein : Grundriß der deutschen Nationalliteratur. 1827 ;<sup>2</sup>1830 ;<sup>3</sup>stark umgearbeitet Leipzig 1837 ;<sup>4</sup>1847-66, die letzte von Koberstein selbst besorgte ;<sup>5</sup>die von Karl Barsch hrsg. wie folgt : Bd. 1 (1872) : Von den Anfängen bis Ende des 16. Jahrhundert ; Bd. 2 (1872) : 17. und

erste Hälfte des 18. Jahrhundert ; Bd. 3 (1872), 4, 5 (1873) und Registerband (1884).

第6版(1884)としてバルチュによって編まれたうち、第5版と同一内容で第1巻のみが上版された。今日使用に耐える文学史のうち最古のものである。難点は記述ではなく、むしろその完璧さと文献学的な精密さ、とくに過度の注釈にある。ジャンルによって処理されているが、形式的また美的な要因を十分考慮している。

18. Hans Ferdinand Maβmann: Das vergangene Jahrzehnd der deutschen Literatur. 1827.

詩作もする体操教育学者で、のちにミュンヘンやベルリンの大学でドイツ文学の教授となった。

19. Joseph Hillebrand: Lehrbuch der Literatur-Ästhetik. 1828. (Darin ein Abriβ der Geschichte der deutschen Nationalliteratur《.)

ハイデルベルク大学で Hegel の後任者となった人物である。リベラルな後期理想主義を代表するひとりで、ライプニッツに立ち帰った立場から、人間学に携わるばかりではなく、文学史に興味をもった人物であった。

18. Wolfgang Menzel: Die deutsche Literatur. Erster Theil. Stuttgart 1828.

シレジア生まれのメンツェルは、学生生活の向上と祖国愛の養成を目的とする大学生組合事件で、4年間スイスで亡命生活をおくったり、またジャーナリズム活動の傍ら、政治に関わり、政治の歴史を記述するばかりではなく、シラーとロマン派を擁護し、ゲーテに論駁したり、また連邦議会による L. ビヨルネに対する迫害と処罰のきっかけを与えた。これは美的評価の規矩に依るべきところを道徳的・政治的な証言にすり替えた点にある。

19. Georg Reinbeck: Abriβ der Geschichte der deutschen Dichtkunst und ihrer Literatur. 1829.

20. Tobias Gottfried Schröer: Kurze Geschichte der deutschen Poesie und Prosa. 1830.

著者は有名な学者一家の祖である。

## B. 1830年から1871年まで

1. August Wilhelm Bohtz: Geschichte der neueren deutschen Poesie in Vorlesungen. Göttingen 1832.

2. Friedrich August Pischon: Leidfaden zur Geschichte der deutschen Literatur. Leipzig / Berlin <sup>2</sup>1834.
3. Georg Gottfried Gervinus: Geschichte der poetischen National-Literatur der Deutschen. 5 Bde. 1835-42; <sup>2</sup>unter dem Titel: Geschichteder deutschen Dichtung, Leipzig 1840-44; <sup>5</sup>hrsg. v. Karl Bartsch (1871-74).  
 オールド・リベラリストの立場よりの歴史家にふさわしい厳密な判断と重厚な文体が目立つが、歴史発展の観点より文学が初めて取り上げられ、しかも文学上の発展が国家的な発展全体と結び付けられ、他方、また時代に馴染まない非政治的な詩人の個人的偉大さが認められて記述された。
4. Johann Wilhelm Schäfer: Grundriß der Geschichte der deutschen Literatur. Bremen 1836; <sup>12</sup>1877.  
 著者はブレーメン近郊に生まれ、ライプチヒ大学でプロテスタント神学と文献学を学び、ブレーメンで父親と同様に教師生活を送った。
5. Heinrich Laube: Geschichte der deutschen Literatur. Bd. 1-4. 1839-40.  
 大学時代、神学を学び、禁じられていた大学生組合に加入したことから、後年、文筆上の違反のとがで、拘禁されたことがある。新聞の編集や政治活動に携わったあとで、劇場支配人のかたわら、彼の文学史は、言語時期に従って5期（ゴート語、古高ドイツ語、中高ドイツ語、新高ドイツ語、古典ドイツ語）に分け、かつ他方で、文学史のグループに従って分類している。
6. Hermann Marggraff: Deutschlands jüngste Literatur und Kulturepoche. 1839.  
 ベルリン等で編集の仕事の続け、「青年ドイツ派」の精神的血縁者としてドラマや抒情詩、ユーモア小説や批評を書いた人物である。
7. Ludwig Wihl: Geschichte der deutschen Nationalliteratur. 1840.  
 ラウベ等と同様に青年ドイツ派のタイプである。
8. Johann Heinrich Gelzer: Die deutsche poetische Literatur seit Klopstock und Lessing. Nach ihren ethischen und religiösen Gesichtspunkten. Leipzig 1841.  
 第2版(1848)は》Die neue deutsche Nationalliteratur nach ihren ethischen und religiösen Gesichtspunkten. Zur inneren Geschichte des deutschen Protestantismus《の表題(2巻)に改められた。著者はフリードリッ

ヒ・ヴィルヘルム 1 世の身近にいたスイス生まれの歴史家である。

9. Georg Gottfried Gervinus: Handbuch der Geschichte der poetischen National-literatur der Deutschen. 1842.  
上記の B-3 の摘要である。
10. Theodor Mundt: Geschichte der Literatur der Gegenwart. 1842; <sup>2</sup>1849.  
「青年ドイツ派」の指導的作家のひとりで、自由理念を求め、政治問題を含めた内容豊富な創作をつづけ、またブレスラウをはじめとする大学で歴史を講じた。
11. Karl Friedrich Rinne: Innere Geschichte der Entwicklung der deutschen National-literatur. 1842-43.  
最初から現代までを対象にしているが、詩人個人よりも一般的説明を重視している。
12. Johann Wilhelm Schäfer: Handbuch der Geschichte der deutschen Literatur. 1842-44; <sup>2</sup>1855.
13. Robert E. Prutz: Die politische Poesie der Deutschen. 1843.  
著者はベルリン、ブレスラウ、ハレの諸大学で哲学、文献学、歴史を学んだ。ラヂカルな自由主義の秘密運動のため、ドレスデン、イェナ、ハンブルク等を遍歴し、1848年の暴動に関与したが、1849年にハレ大学文学史教授へ招聘された。本書では、当初、最初から古典主義までのあらゆるジャンルを視野にいたした新書版の文学史であった。Gelzer, Cholevius, Eichendorff と同様に、一定の視点を強調した文学史である。
14. Max Wilhelm Götzinger: Die deutsche Sprache und ihre Literatur. In Bd. 2, Teil 1. 1844.  
この普及版の第 1 分冊は、最初からシラーの第 2 期までを収めている。第 2 分冊はロマン主義までを扱う予定であったが、公刊されなかった。
15. Christian Oeser [=Tobias Gottfried Schröer]: Geschichte der deutschen Poesie in leicht faßlichen Umrissen für die reifere Jugend beiderlei Geschlechts. 1844. Bearbeitet von Johann Wilhelm Schäfer(1859).
16. Hermann Kletke: Handbuch zur Geschichte der neueren deutschen Literatur. Biographien, Charakteristiken und Proben. Zum Gebrauch für Lehrer und Lehrerinnen in den oberen Klassen höherer Töchterschulen, wie auch zum Selbststudium. Berlin 1845.
17. August Friedrich Vilmar: Vorlesungen über die Geschichte der deu-

tschen Nationalliteratur. 1845; <sup>2</sup>1847; <sup>3</sup>1848 unter dem Titel »Geschichte der deutschen Literatur«; <sup>17</sup>1875 bearbeitet von Philipp Wackernagel; von <sup>18</sup>1877 bis <sup>21</sup>1883 bearbeitet von Carl Goedeke; seit <sup>22</sup>1884 mit der in Abschnitt III 2 noch besonders angeführten Fortsetzung von Adolf Stern unter dem Titel »Die deutsche Nationalliteratur vom Tode Goethes bis zur Gegenwart«.

Karl Marcke によって他の書肆から独自に手を加えて出版された続編(1907)は、とくに近代のカトリック文学に配慮をしているが、学問的要請を満足さすものではない。ヴィルマール自身の著作は、初めて、厳格にプロテスタントの立場から著述されている。一方では、とくに強烈な個性の表現として有意義であり、他方、国民的なものに対して深い感受性からアプローチしている。彼の信奉者から反プロイセン的なヘッセン公正党が生まれている。

18. Joseph Hillebrand: Die deutsche Nationalliteratur seit dem Anfang des 18. Jahrhundert. 3 Bde. 1845-46; <sup>3</sup>1875.
19. Bernhard Hüppe: Geschichte der deutschen National-Literatur mit Proben von Ulfila bis Gottsched nebst einem Glossar für Gymnasien und höhere Lehranstalten. Coesfeld 1846.
20. Ludwig Ettmüller: Handbuch der deutschen Literaturgeschichte von den ältesten bis auf die neuesten Zeiten, mit Einschluß der angelsächsischen, altnordischen und mittelniederländischen Schriftwerke. 1847.  
時代の傾向とジャンルに基づいて分類しようとするが、近代、とくに18、19世紀はぞんざいな取り扱いを受け、さほど重要な文学史ではない。
21. Georg Weber: Geschichte der deutschen Literatur. 1847.  
ヴェバーは苦学力行の人物で、本書は学校教師時代に彼が編纂した有名な「世界史教科書」(後に、「教科書並びに便覧」)からのリプリントで、ドイツ文学史の有機的な発展を軽便に見通せる概説である。版を幾度も重ねたが、当時ふさわしい優れたハンドブックであった。
22. Johann August Moritz Brühl: Geschichte der deutschen Literatur. Für höhere Lehranstalten und Selbststudium. Mainz 1851.
23. Wilhelm Wackernagel: Geschichte der deutschen Literatur. Bd. 1(1851) und 2(1853); <sup>2</sup>hrsg. v. E. Martin 1879-94.  
K. ラッハマンの弟子で、またJ. グリムと双璧のゲルマニストであった。

本書の第1分冊の発行は1848年にはじまり、初めの2巻は15世紀末までを記述したものであり、1872年に45頁の増補が加えられた。Ernst Matinの手になる索引をつけてまとめられたものは、《Geschichte der deutschen Literatur bis zum 30jährigen Krieg》と称せられ、ヴァッケルナーゲルの第2版以降のドイツ読本の第4部として算入されるようになった。(《Lesebuch》の初版本には文学史は添えられていない。)マルティンの精神的労苦を伴った改訂版の第1巻(1879)は、1872年版と同一であるが、第2巻(1894)は1870年までの事項を研究対象にしている。文学史の初心の読み物としてすぐれているばかりではなく、また有力な研究書として利用された理由は、テキスト文献に対して徹底と精密とを期し、明晰で心地よい表現が結びついていたからである。

24. Heinrich Kurz: Geschichte der deutschen Literatur. 3 Bde. 1851-59.  
第4版(1868-69)の発行後、第4巻として《Von Goethes Tod bis auf die neueste Zeit》が加えられた。最終的に完成したのは1892年であり、第1巻と第2巻が8版、第3巻が7版、第4巻が4版を重ねた時期である。読者の関心をそそる詩人の略歴や肖像画のほかに、テキストのさわり部分が添えられ、さほど上手に処理されていないのにもかかわらず、詞華集として使用できるほどである。またとりわけ第3巻や第4巻では、詩人の伝記的な事実や世間にあまり知られていない小説や戯曲の内容説明を読み、下記の Menzel の場合と同様に、引用したくなるほどである。素材史関係にも造詣がふかく、また時代観察や文学ジャンルによる時流や導かれるべきグループについての言及がされている。因みに言えば、価値判断に現れる著者の政治的信念は当時のリベラルで民主的な信条から生まれたものである。
25. Tinette Homberg: Geschichte der schönen Literatur der Deutschen für Frauen. Düsseldorf/Scheller 1853.
26. Julian Schmidt: Geschichte der deutschen Nationalliteratur im 19. Jahrhundert. 2 Bde. 1853; <sup>4</sup> u. d. T.: Geschichte der deutschen Litteratur seit Lessings Tod (3 Bde., <sup>5</sup> umgearb. 1865-67.)  
改訂された第2版は挿し絵が加えられている。彼の無数の文学史著述は独創に富むものではなく、素朴な生活観とリアルな文学観に規定されている。それだけに、市民社会に多大の影響を及ぼした。なお、著者は F. W. グルノウや G. フライタークと《Grenzboten》の共同経営にあたっ

- たり、旧自由党の機関紙「ベルリン一般新聞」等の発行にあっていた。
27. Johann August Moritz Brühl: Geschichte der katholischen Literatur Deutschlands vom 17. Jahrhundert bis zur Gegenwart. In kritischbiographischen Umrissen. Ein vollständiger Beitrag zur National-Literaturgeschichte. Leipzig 1854.
28. Robert Prutz: Neue Schriften. Zur deutschen Literatur und Kulturgeschichte. 1. Band. Halle 1854.  
A. v. シャミュソーの「文芸年鑑」等の協力者で、筆禍問題では A. v. フンボルトの取りなしで救われたりしたあと、教授となったり、民謡風の抒情詩や社会的傾向の強い小説を執筆していた。
29. Johannes Scherr: Geschichte der deutschen Literatur. 1854.  
著者は文化史にも興味をよす小説家にして政治家であった。南独の民主党の指導者として、大ドイツ主義の立場のため、スイスへ亡命を余儀なくされた。
30. Karl Leo Cholevius: Geschichte der deutschen Poesie nach ihren antiken Elementen. 2 Bde. 1854-56.  
古典古代的な原理とロマン主義的な原理との絶えざる、しかもゲーテとシラーにおいてしばらく調停された闘いとして、文学的發展をとらえる。古代に対して味方するか、それとも敵対するかという2分法による人物を前景におく。たとえロマン派詩人との触発から生まれ来たものでも、この独創的で、徹底した著書は、今でも、なお新たに党派を生み出す。
31. Adolf Schumann: Kurzer Abriss der Geschichte der deutschen Literatur für höhere Töchterschulen. Brandenburg 1854; <sup>7</sup>1882.  
著者はブラウンシュヴァイクの高等女学校校長であった。
32. Rudolf von Gottschall: Die deutsche National-Literatur in der 1. Hälfte des 19. Jahrhunderts. 2 Bde. 1855; ab <sup>3</sup> u. d. T.: Die deutsche National-literatur des 19. Jahrhundert. 4 Bde. 1872; <sup>5</sup>1881; <sup>7</sup>1901-02.  
若きドイツの自由精神で抒情詩やドラマを発表し、国民に大いなる影響をあたえた詩人の文学史である。
33. Wilhelm Pütz: Übersicht der Geschichte der deutschen Literatur für höhere Lehranstalten. Koblenz (später Leipzig) 1855; <sup>3</sup>1873; <sup>11</sup>1898.  
ニーブルと共に歴史や文献学をケルン大学で学んだ。ケルン他のギムナジウムの上級教師として勤務し、また教育的に有用で分かりやすい

教材に工夫を凝らしたり、歴史、文学史、作文法以外にも、地理、芸術史、自然史といったさまざまな分野の教科書を執筆した。

34. Joseph Freiherr von Eichendorff: Geschichte der poetischen Literatur Deutschlands. Paderborn 1857.

1866年発行の第3版は国民に愛読された詩人の《Vermischte Schriften》の1・2巻に収録されたものであたる。しかもその第2巻は、すでに1846年匿名で雑誌《Historisch-politische Blätter》に、《Zur Geschichte der neueren romantischen Poesie in Deutschland》の表題で発表し、さらに1847年には《Über die ethische und religiöse Bedeutung der neueren romantischen Poesie in Deutschland》と改題して上梓したものである。このカトリック系ロマン主義の傾向をもつ文学史書は、素晴らしい記述にもかかわらず、理解しがたいところがあり、1906年に Wilhelm Kosch によって2冊本に改編された。

35. Heinrich Kurz: Geschichte der deutschen Literatur mit ausgewählten Stücken aus den Werken der vorzüglichsten Schriftsteller. Leipzig<sup>2</sup> 1857.

36. Wolfgang Menzel: Deutsche Dichtung von der ältesten bis auf die neueste Zeit. 3 Bde. Stuttgart 1858-59;<sup>2</sup> u. d. T.: Geschichte der deutschen Dichtung in 3 Bden., 1875.

本書は体系をもたず、混乱したままで、非学問的で、例えようのないほどの偏った党派性を持ち、重視する必要がない。

37. Robert Prutz: Die deutsche Literatur der Gegenwart 1848-1858. Leipzig 1859.

38. Hermenn Hettner: Geschichte der deutschen Literatur im 18. Jahrhundert. 2 Teile. 1862-64;<sup>8</sup> 1929; nhg., G. Erler 1961, 2 Bde.

シュレジア生まれの芸術史ならびに文学史の大家。

39. Otto Roquette: Geschichte der deutschen Literatur von den ältesten Denkmälern bis auf die neueste Zeit. 1862-63;<sup>3</sup> u. d. T.: Geschichte der deutschen Dichtung, 1878.

1872年に《Geschichte der deutschen Dichtung》の書名で再版されたが、著者は国家学と歴史学の教授であるばかりでなく、F. A. ブロックハウス出版社に語り、1830年に歴史的なポケット本を創設さすほどの多面的な人物で、また詩人であることから、学問的にはさほど重要ではないけれども、気軽に読めるポピュラーな文学史も執筆した。

40. Friedrich von Raumer : Handbuch zur Geschichte der Literatur. 4 Teile. Leipzig 1864-66.
41. Gustav Brugier : Geschichte der deutschen Nationalliteratur. 1865.  
 コンスタンツ大寺院の主任司祭から教皇の私的最高顧問になった人の著述である。はじめ、カトリック的立場から、高等女学校をはじめとする女子教育機関用に編まれたものである。版を重ねている内に、誤りが訂正され、欠陥が正された。
42. Wilhelm Lindemann : Geschichte der deutschen Literatur. Freiburg 1866 ;<sup>2</sup>1868.  
 ボン大学でカトリック神学を学び、司教と上級市民学校校長を兼任したり、プロイセン衆議院議員と成った人物の著作である。だが、第6版(1887-89)で第1巻をFr. Brüllが、第2巻を詩人のJoseph Seeberが改編した。第7版(1897-98)はAnselm Salzerによって、第8版はMax Ettlingerによって校訂された。
43. Hermann Kluge : Geschichte der deutschen Nationalliteratur. 1869.  
 イエーナ、ハイデルベルク、ライプチヒの大学で学んだ後、アルテンブルク高等中学校の教授を勤め、またいくつかの図書館司書として活躍した。本書は学生用に編んだものである。
44. Friedrich Sehrwald : Deutsche Dichter und Denker. Geschichte der deutschen Literatur usw. 2 Bde. 1871 ;<sup>2</sup>1884.  
 部分的には、ユニークなグループ分けが行われているが、一般人向きである。

C. 1872年から1918年まで (帝国時代)

1. H. Kurz : Geschichte der deutschen Literatur. Bd. 4. Von Goethes Tod bis auf die neueste Zeit. 1872 ;<sup>5</sup>1894.
2. K. J. Schröder : Die deutsche Dichtung des 19. Jahrhundert in ihren bedeutenderen Erscheinungen. 1875.
3. Edmund Hofer : Deutsche Literaturgeschichte für Frauen und Jungfrauen. Stuttgart 1876 ;<sup>2</sup>1878.  
 詩人が著者である。
5. Franz Hirsch : Illustrierte Literaturgeschichte des deutschen Volkes. Leipzig 1877 ;<sup>2</sup>1878.

- (6) Robert Koenig: Deutsche Literaturgeschichte. 2 Bde. Leipzig 1878; <sup>19</sup> mit der sechzehnten bis achtzehnten übereinstimmende Aufl. Bielefeld und Leipzig 1887; <sup>23</sup> 1892; <sup>25</sup> 1894; <sup>29</sup> bearb. und bis auf die Gegenwart fortgeführt von Karl Kinzel; <sup>32</sup> 1908; <sup>34</sup> Berlin 1919; <sup>36</sup> Bielefeld und Leipzig 1925.
- 第32版(1910)は Karl Kinzel によって編纂された。初めは信頼に欠け、蕪雑で誤謬さえ含んでいた。だが、本格的な挿し絵つきのドイツ文学史として普及した。版を重ねるごとに本質的な欠陥は正されたけれども、文学史研究上では軽視して差し支えない。
7. Daniel Sanders: Geschichte der deutschen Sprache und Literatur bis zu Goethes Tod. 1879; <sup>2</sup> 1880.
- 偉大な辞書編纂者の仕事としては取るに足りない著述である。》Geschichte der deutschen Literatur《と題して Julia Dumcke により継続された。
- (8) Otto von Leixner: Geschichte der alten Litteratur. 2 Teile. 1880; <sup>5</sup> mit der vierten gleichlautende Aufl., mit 140 Text-Abbildungen und 26 teilweise mehrfarbigen Beilagen, Leipzig 1899.
9. Richard Weitbrecht: Geschichte der deutschen Dichtung von den Anfängen bis zur Gegenwart. 1880.
- 作家 Karl Weitbrecht の弟にあたり、詩人の試みた一般向けの著述である。
10. Gottlob Egelhaaf: Grundzüge der deutschen Literaturgeschichte. Ein Hilfsbuch für Schulen und zum Privatgebrauch. Heilborn 1881; <sup>24</sup> Leipzig.
- (11) Karl Goedeke: Grundriß zur Geschichte der deutschen Dichtung. Aus den Quellen. Dresden 1881; <sup>2</sup> ganz neu bearb. Aufl. 1884-1953, in 13 Bde., hrsg. v. d. Deutschen Akademie der Wissenschaft zu Berlin unter Leitung von L. Magon, (Red: H. Jacob. Bd. XIV, Lfg. 1-3. Berlin 1955-57. Abgeschlossen: Bd. XIV, 1959. Bd. XV, Lfg. 1, 1964); <sup>3</sup> neu bearb. Aufl., fortges. v. E. Goedeke, Bd. IV, Abt. 1-4, Dresden 1910-16, (neuerdings ergänzt: Abt. 5, Goethe-Bibliographie 1912-1950, bearb. v. C. Diesch und P. Schlager, hrsg. v. H. Jacob, Berlin 1960); neue Folge < Fortführung von 1830 bis 1880 >, hrsg. v. der Akademie der Wissenschaft zu Berlin unter Leitung v. L. Magon, bearb. v. G. Minde-Pouet, Eva Rothe, Bd. 1, Lfl.

1-3, Berlin 1955-57.

ドイツ文学史を執筆する者には必須の大資料集である。

12. S. L. Salomon: Geschichte der deutschen Nationalliteratur des 19. Jahrhunderts. 1881; <sup>2</sup>1887.

- (13) Wilhelm Scherer: Geschichte der deutschen Literatur. 1883.

第4版(1887)以降は、Edward Schröderの校訂をうけたものである。ゲルヴィーヌス以来出版されたもので最も重要な史書である。ドイツの文化的な発展全体をたえず視野において、徹底した専門的な知識と普遍的な教養に基づいた叙述を行っている。その説明は、初めは年代記風であるが、やがてそのように配列された13章で、のびのびと独創的に結び付けられながら、1830年頃まで至り、ゲーテの「ファウスト」でピークに達する。ゲルヴィーヌスの場合のように、シェーラーの文学史は、それ以降の個別研究の進展に対しても、一定の影響をもった。史書として、注に文献からの素晴らしい抜粋が載っているばかりでなく、年代記として添えられた表も Armin の死からグリムのドイツ神秘主義やゲルヴィーヌスの名著に至るまで心にくい配慮が加えられている。シェーラーの死後、E. Schröderの助力をうけたが(最終は16版, 1927), それに並んで1918年以降また O. Walzel に引き継がれ(最終, 第4版, 1928), 同時に J. Körner が材料豊富な文献書目を加えたが(1921; 1928), その第3版(1949)は独立した形をとって、*Bibliographisches Handbuch des deutschen Schrifttums* 《の書名をもつ必携の便覧となった。

14. A. Stern [d. i. A. Ernst]: Die deutsche Nationalliteratur vom Tode Goethes bis zur Gegenwart. Als Fortsetzung in: A. F. C. Vilmar, Geschichte der deutschen Nationalliteratur. [1845] <sup>22</sup>1884; <sup>27</sup>1911; Sonderausgabe 1886; <sup>6</sup>(erweitert von H. Löbner)1909.

15. Franz Hirsch: Geschichte der deutschen Literatur bis auf die neueste Zeit. 3 Bde. 1884-85. (Aus: Geschichte der Weltliteratur in Einzeldarstellung.)

さほど重要な文学史ではない。

16. Emil Brenning: Geschichte der deutschen Literatur. Lahr 1885; <sup>2</sup>1903.  
17. Theodor Landmann: Schatzkästchen der deutschen Literatur. Leitfaden für den Unterricht in der deutschen Literatur in höheren Mädchenchulen und Lehrerinnen-Seminaren. Wittenberg 1885.

18. Julian Schmidt : Geschichte der deutschen Literatur von Leibniz bis auf unsere Zeit. 5 Bde. 1886-96.
19. Otto Stiller : Leitfaden zur Repetition der deutschen Litteraturgeschichte für höhere Mädchenschulen und Seminarien. In vier Teilen. Berlin 1887-1905.
20. Manfred Wittich : Geschichte der älteren deutschen Literatur. Dresden 1889.
21. P. Heinze und R. Goette : Geschichte der deutschen Literatur von Goethes Tode bis zur Gegenwart. 1890 ; vermehr. 1903.
22. Karl Lamprecht : Deutsche Geschichte. 12 Bde. 1891-1909.  
とくに第5巻から第8巻にドイツ文学の詳細な記述がある。
- (23) (Hrsg.) Joseph Kürschner : Geschichte der deutschen Literatur. (Bd. 163 der Deutschen Nationalen Literatur.) 1892-84.  
Teil 1. Wolfgang Golther : Von den ersten Anfängen bis zum Ausgang bis zum Ausgang des Mittelalters.  
Teil 2. Karl Borinski : Seit dem Ausgang des Mittelalters.  
新進の中世文学研究者として教授資格を取ったばかりで、それぞれロシュトック大学とミュンヘン大学へ就職するまえのゴルターとポリンスキイが執筆を担当した。第2部は、シェーラーと同様に、ゲーテのファウストでもって終わっている。
24. Max Koch : Geschichte der deutschen Literatur. 1893.  
マールブルク、ブレスラウの大学を歴任した教授である。
25. Gotthold Klee : Grundzüge der deutschen Literaturgeschichte. Für höhere Schulen und zum Selbstunterricht. Berlin 1895 ; <sup>3</sup>verbesserte Aufl., mit Vorwort v. Alfred Biese.  
著者はパウケン・ギムナジウム教授。
26. Elisabeth Margaretha Hamann (Pseud. E. M. Harms) : Abriß der Geschichte der deutschen Literatur. Zum Gebrauche an höheren Unterrichtsanstalten und zur Selbstbelehrung. Freiburg 1895 ; <sup>7</sup>1918.
27. Gustav Brugier : Abriß der deutschen Nationalliteratur. 1895.  
ドイツ国民文学史第9版のE. M. Harms (筆名 Harmann) によって編まれた摘要もある。
28. Friedrich Vogt und Max Koch : Geschichte der deutschen Literatur. 2

Bde. Leipzig und Wien 1897; <sup>5</sup>1934-38 in 3 Bden.

古代文学と近世文学との史的な境界線を、ほぼ1600年頃においていることは注目にあたいする。また信頼できる資料に基づき、軽快な叙述と豊富な挿し絵を使用しているため、ライクスナー、ケーニッヒ、エンゲル等の文学史に物足りなさを覚えた者に最適である。

29. Karl Storck : Deutsche Literaturgeschichte. 1898.  
月刊雑誌《Der Türmer》の編集長をつとめた人物で、重点的に19世紀を取り扱うとともに、視点を郷土文学へむけている。
30. W. Mardner : Litteraturgeschichte für höhere Mädchenschulen und zum Selbstgebrauche. Mainz <sup>3</sup>1899.
31. S. Lublinski : Litratur und Geschichte im 19. Jahrhundert. 1900.
32. Carl Busse : Geschichte der Deutsche Dichtung im 19. Jahrhundert. 1900.  
日本では詩篇「山のあなた」の原作者として著名であるが、リーリエンクローンに倣った抒情詩を創ったり、小説や物語のほか《Geschichte der Weltliteratur》(1910-13, 2 Bde.)も世に送っている。
33. Karl Weitbrecht : Deutsche Literaturgeschichte des 19. Jahrhundert. 2 Bde. 1901.  
4歳年少の弟リヒアルトより11年遅れの文学史書である。
- (34) Adolf Bartels : Geschichte der deutschen Literatur. 2Bde. 1901-02.  
当初は、シェラー学派の学究的な文学史に意識的に対峙して主観を尊ぶ立場をとっていたが、やがて文学観でもドイツの民族的な特性を強調して、ユダヤ人排斥の姿勢を露にしたことから、ナチスの規範的な意義を帯びるにいたった。
35. Richard Moritz Meyer : Grundriß der neueren deutschen Literaturgeschichte. In : R. M. M. 1902; <sup>2</sup>1907.
36. Karl Weitbrecht : Deutsche Literaturgeschichte des 19. Jahrhundert. 2 Bde. 1902; <sup>2</sup>1908; Neudruck 1920.
37. Karl Weidbrecht : Deutsche Literaturgeschichte der Klassikerzeit. 1902.
38. Johann Howald : Geschichte der deutschen Literatur. Konstanz 1904.
39. Hermann Jantzen : Deutsche Literaturgeschichte. (In Hillgers Illustrierten Volksbüchern.) 1904.  
著者は A. Goldschmidt 師事し、フライブルク、フランクフルト、ミュンヘンの各大学を歴任したた芸術史教授である。

40. Valentin Pollak : Abriß der deutschen Literaturgeschichte. (In : Karl Schiller : Handbuch der deutschen Sprache. 2 Auflage.) 1905.  
 学生の学習用。
- (41) Eduard Engel : Geschichte der deutschen Literatur. Von den Anfängen bis zum 19. Jahrhundert. 2 Bde. Wien und Leipzig 1906 ; <sup>5</sup>1908 ; <sup>38</sup>durchgesehene Aufl. 1929.  
 さほど注目すべき著書ではない。著者は旧ドイツ帝国議会の速記者をしていた作家である。
42. Gotthold Boetticher : Deutsche Literaturgeschichte. Hamburg 1906.
43. R. Riemann : Das 19. Jahrhundert der deutschen Literatur. 1907 ; <sup>3</sup> [u. d. T. : Von Goethe zum Expressionismus] 1922.
44. Karl Cornelius : Leitfaden der deutschen Literaturgeschichte in Aufgaben, Fragen und Antworten, mit Angabe des Inhalts und des Grundgedankens der Dichtungen zusammengestellt. Paderborn 1907 ; <sup>2</sup>1913.
45. Alfred Biese : Deutsche Literaturgeschichte. 3 Bde. 1907-09.  
 教養人向けの書籍である。
46. E. Arnold : Illustrierte deutsche Literaturgeschichte. Berlin 1908.
- (47) Friedrich Kummer : Deutsche Literaturgeschichte des neunzehnten Jahrhunderts. [Dargestellt nach Generationen] Dresden 1909 ; <sup>26</sup> [u. d. T. : Deutsche Literaturgeschichte des 19. und 20. Jahrhundert. 2 Bde. 1924.]
48. Hans Sittenberger : Einführung in die Geschichte der deutschen Literatur. 1909.  
 学生用。すこし粗雑である。
49. Carl Bleibtreu : Geschichte der deutschen National-Literatur von Goethes Tode bis zur Gegenwart, hrsg. Gellert. 1912.  
 戦争記録画家ゲオルク・ブライプトロイの息子で、父親に似て戦争場面の描写の巧みな物語や小説を残している。
50. Georg Witkowski : Die Entwicklung der deutschen Literatur seit 1830. 1911 ; <sup>2</sup>1912.  
 政治的理由でアムステルダムへ移住したこともあるが、のちにライプチヒ大学教授や「読書雑誌」の出版者として活躍した。
51. Epochen der deutschen Literatur. Geschichtliche Darstellungen. 6 Bde. Stuttgart. 1912-40 ; <sup>2</sup>1922 bzw. 1947-49, 6 Bde. nebst Materialienbände.

- (52) Josef Nadler : Literaturgeschichte der deutschen Stämme und Landschaften. 3 Bde. Regensburg 1912-18; <sup>4</sup> u. d. T. : Literaturgeschichte des deutschen Volkes, Dichtung und Schrifttum der deutschen Stämme und Landschaften, 4 Bde., Berlin 1938-41.

恩師 August Sauer の著書《Literaturgeschichte und Volkskunde》(1907)に触発されて、文芸を種族と地方とによって整理し、そこからその意義と特異性を規定しようとした。第4版(1938-41)で《Literaturgeschichte des deutschen Volkes. Dichtung und Schrifttum der deutschen Stämme und Landschaften.》(4 Bde, Berlin.)と改題されている。豊富な文献のため、とりわけ17世紀の研究者にバロック時代の未知の詩人の多く紹介された。

53. J. Bobeth : Die literarischen Strömungen des 19. Jahrhundert in ihrem Verhältnis zur zeitgenössischen Politik. In : Zeitschrift für deutschen Unterricht. Bd. 29. 1914.

54. Walther Brecht : Zur deutschen Literaturentwicklung seit 1832. In : Zeitschrift für die österreichischen Gymnasien. Bd. 67. 1916.

ポーゼン, ヴィーン, プレスラウ, ミュンヘンの各大学でドイツ文学教授を続けたが, 1937年に政治的理由で年金生活を送ることになった。彼は詩人ホフマンスタールの遺品管理人として著名である。

- (55) Oskar Walzel : Die deutsche Literatur von Goethes Tod bis zur Gegenwart. 1917. In : W. Scherer, Geschichte der deutschen Literatur. Derselbe : Die deutsche Dichtung seit Goethes Tod. 1919; <sup>2</sup>erweitert 1920; <sup>3</sup>vermehrt [L : J. Körner] 1921; <sup>5</sup>gekürzt 1929.

本書は、のちに Josef Körner の文献集をつけたが、これがハンドブックのもととなった。ヴァルトツェルの綿密な理論ときわめて正しい評価に触発され、また魅せられてしまうほど、精神的な方向でゲルマニストに感化を与えた一書となった。まさしく文学史記述の白眉である。

未完

1993.4.1